

結納ゆいのうの行方

野村胡堂

—

「親分」

「何だ八、また大變の売物でもあるのかい、鼻の孔が膨ふくらんでいるようだが」
錢形の平次はいつでもこんな調子でした。寝そべったまま煙草盆を引寄せて、
こればかりは分ぶん不ふ相そう応おうに贅ぜい沢たくな水府煙草を一服、紫むらさきの煙がゆらゆらと這って行
く縁側えんがわのあたりに、八五郎の大きな鼻が膨ふくらんでいると言った、天下泰平な夏
の日の昼下りです。

「大變が種たね切ぎれなんで、ちかごろは朝湯に昼湯に留湯だ。一日に三度ずつ入ると、
少しフヤけるような心持だね、親分」

「呆れた野郎だ。十手なんか内懐うちふところに突つ張らかして、わずかばかりの湯銭を誤ご魔化まかしやしめえな」

「飛んでもねえ、そんな不景気な事をするものですか、——不景気と言や、親分、ちかごろ銭形の親分が銭を投げねえという評判だが、親分の懐具ふところ合もそんなに不景気なんですかい」

「馬鹿にしちやいけねえ、金は小判というものをうんと持っているよ。それを投ほうるような強い相手が出て来ないだけのことさ」

「へッ、へッ」

「いやな笑いようをするじゃないか」

「その強そうな相手があったら、どうします、親分」

「またペテンにかけて俺を引出そうと言うのか、その強そうな相手と言うのは誰だ、——次第によっちゃ乗出さないものでもない」

平次は起直りました。春から大した御用もなく、巾着切や空巢狙を追い廻させられて、銭形の親分も少し腐っていた最中だったのです。

「品川の大黒屋常右衛門——親分も知っていないさるでしょう」

「石井常右衛門の親類かい」

「そんな気のきかない浅黄裏あさぎうらじゃない、品川では暖簾のれんの古い酒屋ですぜ」

「フーン」

「その娘——お関というのは、十八になったばかりだが、品川小町と言われる大したきりようだ。手代の千代松と嫁合めあわせ暖簾を分ける筈だったが、ちかごろ大黒屋は恐ろしい左前で、盆まじままでに二三千両纏まとらなきや主人の常右衛門首でも縊くらなきやならねえ」

「——」

平次は黙ってガラッ八の長広舌に聴き入りました。この天稟てんびんの早耳は、また

何か重大なものを嗅ぎつけて来た様子です。

「幸い、池の端茅町かやの江島屋良助の伴良太郎が、フトした折にお関を見染めた」
「あの馬鹿息子がかい」

「息子は馬鹿でも、親爺は下谷一番の金持だ。上野の御用を勤めて、何万両と溜め込み、金の費い途に困って、庭石の代りに小判を敷いたり、子供の玩具おもちゃにしたり」

「嘘を吐きやがれ」

「それは嘘だが、とにかく、伴に日本一の嫁を貰うんだからと嫌がる大黒屋へ人橋か架けて口説き落とし、その代り結納は千両箱が三つ、こいつは空からじゃないぜ、親分」

「大黒屋へやったというのか」

三千両の結納は、江戸の大町人のする事にしても、少し奢おごりが過ぎます。

「池の端の江島屋から、馬に積んで番頭と仲人夫婦が付添い品川大黒屋まで持って行って、江島屋の番頭太兵衛や、仲人の佐野屋佐吉夫妻が立ち会いの上、三つの千両箱を開けて見ると、こいつが皆な大粒の砂利じやりになっていたというから驚くじゃありませんか」

「何だと？ 八」

銭形平次もさすがに驚きました。江戸の街の真昼、三人も付添って行った三千両の小判が、馬の背で砂利に化ける筈はありません。

「だから行って見て下さいよ、——三千両は目腐れ金だが——」
「大きな事を言やがれ」

一両はざっと四匁、その頃の良質の小判は一枚でも今の相場にして一万円位につくわけで、三千両の値打、直訳ちよくやくして三千万円、経済力は五千万円にも相当するでしょう。三貫とも纏まった銭を持ったことのないガラツ八が、こんなこ

とを言うのは洒落しやれにも我慢にもなりません。

「放っておけば大黒屋の亭主は本当に首でも縊くるかも知れませんよ。それに、品川小町のお関を見ただけでも、飛んだ眼の法楽だ——」

「止さないか、馬鹿野郎、——品川は縄張り違いだ」

「池の端は親分の支配しはいだ」

「支配——てえ奴があるかい、人聞きの悪い」

「とにかく行って見ましよう。人助けのためだ」

「それじゃ池の端の江島屋の方へ当って見るとしようか」

「有難ようやてえ、それで頼まれ甲斐があつたというものだ」

漸ようやく腰をあげた平次。ガラツ八はその後ろから、帆ほっ立て尻あおになって煽あおりま
す。

池の端の江島屋というのは、そのころ上野寛永寺の御用を勤めた、老舗しにせの仏具店で、袈裟けさころも法衣、仏壇仏像から、大は釣鐘までも扱ひ、その上、役僧達やくそうだちの金融ゆうから、上野出入りの商人の取次まで引受けて、巨万の身上を作つた下谷一番の大町人でした。

「銭形の親分、丁度いいところで——」

主人の良助は、平次の顔を見ると、そのまま奥へ通します。

「不思議なことがあつたそうだね」

平次は好奇心以外何にも持ち合せない調子で応えました。

「不思議だか当り前だか知りませんが、とにかく、仲人なこうどの佐野屋さん御夫婦と番頭の太兵衛がついて、馬で送つた三千両が品川の大黒屋に着いて、奥へ持つ

て行つて開くと、砂利になつていたそうで——狐ほかに化されたのなら木の葉になります。相手が人間だけに、貫々を勘定して、砂利を詰め替えたのは憎いじゃありませんか」

江島屋の口調では、大黒屋の細工と信じきつている様子です。

「付いて行つた人達は駕籠かい、それとも徒歩かちかい」

「佐野屋のお内儀さんだけは駕籠で、あとの二人は歩きましたよ。佐野屋さんの二人は馬の前に立つて、太兵衛は馬の後から行つたそうですが——」

「途中で休むような事はなかつたらうか」

「番頭を呼んで訊いて見ましよう」

良助が手を鳴らすと、平次の姿を見て次の間まで来ていた太兵衛は、四十男の心得た顔を出しました。

「ね、三千両を送つて行く途中で、馬に水を吞ませるとか、人間が息を継ぐと

か——ともかく何処かで休むような事はなかつたのかい」

平次は続けました。

「飛んでもない親分さん、三千両に間違いがあつては大変と思ひ、三里あまりの道をわき眼もふらずに参りました。水も茶も呑むどころの沙汰さたじゃございません」

少し頑固がんこらしい太兵衛は以ての外と頭を振ります。

「何か途中に変わったところがありやしなかつたかい、喧嘩とか、出入事とか、——お前さんに突き当つて、馬から眼を外そらさせた奴とか」

「そんなものは、ございませぬ、——御膝元とは言いながら、三千両の大金をこう無事に持つて行けるんだから、本当に有難いことだと思ひました、それが——」

太兵衛は口惜くやしそうです。子飼いの番頭らしい一克こくさで、何べん大黒屋へ呶ど

鳴り込なもうとしたことでしよう。

「馬はどのだい」

「町内の十一屋に頼みました。駕籠や吊台つりだいじゃ面白くないから、古風に飾り馬にしようという話で——」

これ以上は何を訊ねても解りません。平次はガラツ八うながを促し立てて、そこから一丁とも離れない、仲通りの飛脚屋ひきやくやに立寄りました。

「銭形の親分さん、——江島屋の三千両のお話でしよう、手前共もあの騒ぎにや、飛んだ迷惑をしていますよ」

十一屋の親方は、平次の顔を見るとこぼし始めました。

「馬はどこにいるんだい」

「お目にかけましょう、裏の厩うまやですが」

案内してくれたのは、裏の大きな厩、五六頭の馬の中に交まじって、一きわ美し

い、鹿毛かげを親方は指します。

「こいつはいい馬だ、——こんなのはたんとあるまいね」と平次。

「武家方の乗馬にはありますが、飛脚馬ひきやくまには勿体ない位の鹿毛ですよ。千両箱が三つというところ十五六貫ですが、この暑い盛りに、三里の道を水も呑ませずに行くんだから、これ位のでなきやあ安心がなりません。——ドウ、ドウ、二本松生れの五歳の牡おすで、ドウ、ドウ」

親方は鹿毛の鼻面なを撫なでながら、自慢半分に説明してくれます。

「曳ひいて行ったのは？」

「そこにいる野郎で、——やい三次、ここへ来て挨拶をしな。銭形の親分さんが訊きてえことがあるとよ、——あれ、あんな野郎だ。頬冠ほおかぶりをしたまま顎あごをしゃくるのは、手前の辞儀じぎかい」

「まあ、いいやな、——三次兄哥あにいとか言ったね。昨日の事を少し詳しく話してくれまいか」

平次はそれとなく、この男の様子を観察しました。年恰好もよく解らないほど物さびておりますが、精々三十——どうかしたらもう少し若いかも知れませんが、葛飾かつしかさい在の百姓の子だというが、それにしてもむくつけき姿です。

「江島屋の門口で旦那が指図をして多勢の見る前で馬につけた三つの千両箱を、品川の大黒屋の店先で、これも多勢の手でおろされ、奥へ進んで行っただけですよ」

「それから三次兄哥はどうした」

「一杯御馳走になって、御祝儀を頂いて、いい心持になって帰りましたよ」

何という無造作な事でしょう。こんな塩梅あんばいでは、平次の鼻でも、疑わしいものは嗅ぎ出せそうもありません。

取って返して、江島屋の家族や雇人を一と通り調べましたが、伴の良太郎が二十五にもなつて、少し呂律ろれつが怪しいほどの足りない人間だということを見ただけ。

「品川の大黒屋の方に何かあるだろう」

「すぐ行きますか、親分」

「向うへ着くと暗くなるが、一と晩の違いで二千両の始末をされるのも業腹ごうはらだ。行つて見ようか」

「へエ」

平次と八五郎はそこから品川まで、三里の道を急ぎます。

三

大黒屋の前は真黒に人立ち、ここには思いも寄らぬ大変な事が始まっており
ました。

「えッ、黙らないか、武士に向つて誘拐かどわかしとは何だ。——借金の抵当かたに、今晚は拙
者が直々に伴れ帰り、内祝言ないしゅうげんを済ませて、宿の妻にするのに何の不思議だ。そ
れが厭なら、用立てた金子百五十両、三年間の利に利が積んで、六百五十両に
なる、今ここで返して貰おうか」

威猛高いたけだかになるのは、三十五六の浪人、高利の金を貸して、品川一円の憎まれ
者になつている、沢屋利助の用心棒、大川原五左衛門という御家人崩れです。

「旦那、それは御無理で、沢屋さんから金は借りましたが、旦那に娘を上げる
とは申しません。それに重なる災難で、昨日も三千両の金が紛失ぶんしつし、思案に余つ
ているところでございます」

店の板敷ひたしに額ひたいを押しつけぬばかり、亭主の常右衛門の声は濡れておりました。

五十七八のまだ働き盛りですが、苦勞にやつれた痛々しさは、瘦せた肩にも、そげた頬にも刻みつけられた姿です。

「——何？ 娘をやる約束はしなかった？ 馬鹿も休み休み言えッ、——返済相成兼候節は如何なる物を御取上げ候共いぞんこれなく異存無之と其方そちの判を捺した証文が入っているぞ。その娘は兼々拙者所望の品だ。六百五十両の代りに貰って行くのが、かどわかし誘拐同様とは何という言草だ」

「金は沢屋が貸したに相違ないが、その月のうちに証文はこの大川原五左衛門が買い取つてある、——さあ娘を渡して貰おうかい」

五左衛門の釘抜くぎぬきのような腕はグイと伸びました。

「あれ——ッ」

見ると父親常右衛門の袖の下に隠れた娘のお関は、五左衛門の手に従つて、

ズルズルと引出されました。

十八娘の美しさが、恐怖きょうふと激情くんじょうに薰蒸くんじょうして、店中に匂うような艶めかしさ。

鹿の子絞の帯も、緋縮緬ひぢりめんの襦袢じゅばんも乱れて、中年男のセピア色の腕にムズと抱えられます。

「お願いでございます。大川原様、それではお嬢様が可哀想——」

飛び付くように若い手代、五左衛門の腕うでに犇ひしとすがります。二十三四の久松型で、主人の娘の危急に取りのぼせたのでしょう。

「何が可哀想、——娘は嬉し泣きに泣いて泣いているではないか」

パツと払った手に弾かれて、手代は物の見事に土間に尻餅しりもちを搗うきました。

「千代松、——長谷倉先生はせくらをお願いして来てくれ、早く、早く」

主人が声を掛けると、手代の千代松は土間から外へ、毬まりのように転まげながら飛出します。

「親分、入って見ましようか」

見兼ねて、ガラツ八は平次の肘ひじを突きました。

「待ちな、もう少し見た方がいい、——まだ宵のうちだ。二本差がどんな威張いばつたって、嫌がる女を、引っ担いで行くわけにも行くまいじゃないか、落着いて見物するがいい」

平次は、野次馬の後ろから背伸びをしてこんな事を言うのです。

「でも、親分」

「気が揉めるのかい、——あの娘は綺麗過ぎるから、いろいろ紛糾いざいざが起るんだよ。あの顔を見たとたん、俺は三千両の行方ゆくえが解るような気がしたよ」

「江島屋へ嫁にやるのを邪魔する奴があるんでしよう」

「シッ——お立会の衆が顔を見るじゃないか、なんて野暮な声を出すんだ」

二人はそれつきり口を噤つぶみましたが、中の争いは、深刻に、執拗に続きます。

「来た来た、長谷倉先生が来たぜ、もう大丈夫だろう」

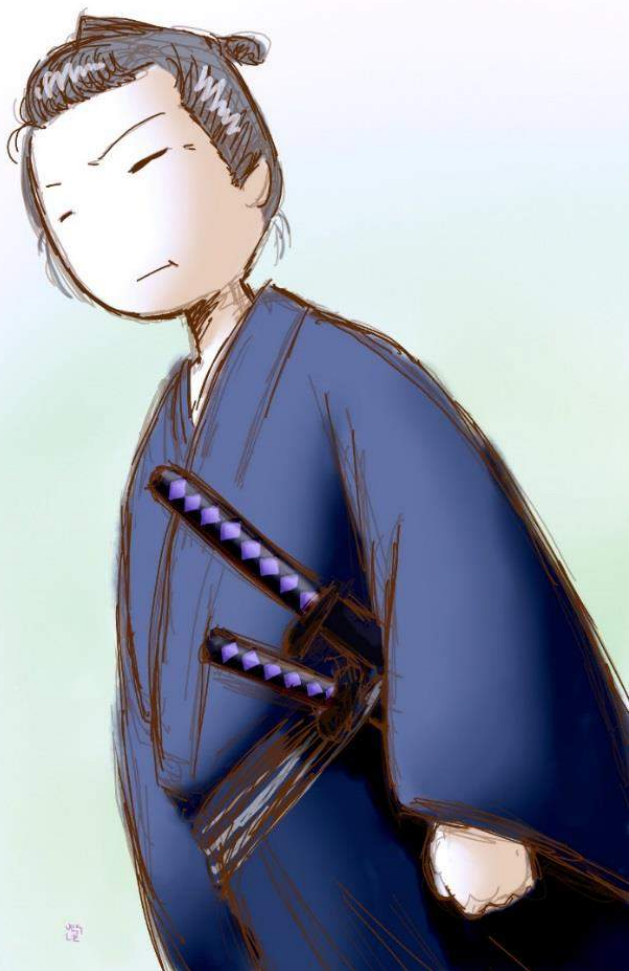
動揺どよめく弥次馬。それを掻きわけて静かに入って来たのは、四十前後の立派な浪人者でした。

「御免よ、——娘を連れて行きたいが、仔細しさいはあるまいな」

「へエへエ、どうぞお召連れ下さいまし」

長谷倉甚六郎の心持を測り兼ねながらも、亭主は相槌あいづちを打ちました。後ろからは手代の千代松が何やら目顔で合図をしております。

「お聞きの通り、その娘は拙者が親元になって、近々嫁入りさす筈ようしゃになっている。無法な事を召さると容赦ようしゃはいたさんぞ」



「何？ 何が無法」

大川原五左衛門はいきり立ちます。

「嫌がる娘を小脇に抱えて、無理に連れ出そうとするのは無法の沙汰ではないか」

長谷倉甚六郎の調子は、静かですけど屹きつとしておりました。

「黙れッ、借金の抵当かたに取って行くのだ——その方は何者だッ、余計な口を出すと、ためにならんぞッ」

「拙者は長谷倉甚六郎、西国の浪人者だ。十年越しこの町内に住み、謡うたいや碁の手ほどきから、棒振り剣術、物の本の素読などを少しばかり教えている」

「貧乏浪人の長谷倉とは御手前か、——なら、口を出さぬがいい。これは六百五十両という大金の出入事だ、——返済相成兼候節は如何なる物を御取上げ候とも異存無之——と首と釣替えの判を捺おした証文が入っているのだ」

大川原五左衛門は威猛高です。

「その物が、この娘だと言うのか」

「いかにも」

「黙れッ、——物は物、人間は人間だ。昔から人間を^か_た抵当に入れるのは御禁制と知らぬか」

「何？」

「如何なる物——とは読んで字の如く物だ。その辺の樽^{たる}でも瓶^{かめ}でも古下駄でも持って行くがいい。人間を連れて行くのは誘拐^{かどわかし}も同様ではないか、痴呆^{たわけめ}奴」

「たわけと言ったな」

「それがたわけでなくて何だ。まして、拙者親元になって、近々嫁入りさす娘だ。その方如き赤鬼にやっけたまるものか」

「已れッ」

「や、手向いするか」

カツとなつて斬り込む大川原五左衛門の刃、やいば長谷倉甚六郎身を捻ひねつて片手拝みの手刀。

「あッ」

ポロリと落した五左衛門の刀を取上げると、足をあげてしたたかに腰のあたりを蹴飛ばしました。

「覚えておれッ、証文に物を言わせるぞ」

腰をさすりながら起き上がる大川原五左衛門。

「馬鹿奴ッ、証文の表はたった百五十両だ。三年で四倍半になる高利を、武士たる者が貸していいか悪いか、白洲しらすへ出て述べ立てて見るがいい」

「何を」

「それからこの腰の物は後日のために預り置く。商人の店先へ来て、拔身を振

り廻した曲者、訴えて出れば御法通りところがまえ所構だ。それとも穩便に返して貰いたかったら、六百五十両持つて来い。鏝びた一文欠けても相成らぬぞ、ハッハッハッ、馬鹿な奴だ」

カラカラと笑う浪人長谷倉甚六郎、まことに水際立った男振りです。

「親分、驚いたね」

それを見て舌を巻いたのは、ガラツ八ばかりではありません。

「手の内も見事だが、知恵者だな、フォーム」

平次もしばらくは唸うなっておりす。

四

「銭形の親分さんで、——飛んだところをお目にかきました」

奥へ平次と八五郎を通して、主人の常右衛門は萎れ返ります。

「いや、反かえっていろいろの事が解ったような気がするよ。三千両の始末を、もう少し詳しく聞きたいが——一体どんな経緯いきさつなんだ」

「こう言ったわけでございます、親分」

主人の常右衛門は、心の苦悩を絞り出すように、こう語り始めました。

品川一番と言われた大黒屋が、家業の左前になったのはツイ五六年前から。型の通り米相場で大穴をあけ、地所も家作も手放して、あと五六百両の不足を、高利貸の沢屋利助に借り、利に利が嵩かさんで、それがもう二千両になっているのでした。

その証文の一枚を買い受けたのは、沢屋の用心棒の大川原五左衛門、半歳も前から、執念深くお関を嫁にと迫りますが、相手が悪いので大黒屋も我慢がなり兼ね、ちようど江島屋から賢かしこくない倅を承知で嫁に来てくれるなら、三千両

の結納金ゆいのうきんを出そうと言うのを渡りに船と、いやがる娘を説き伏せ、家のため、親のため、身を売ったつもりで嫁入りするのを承知させたのでした。

その結納金が三千両、江島屋からは確かに出したと言い、ここへ着いたのは箱に詰めた砂利で、纏まりかけた縁談も滅茶滅茶、その噂を聞くと大川原五左衛門は、さつそく貸金の抵当かたにお関をよこせと乗込んで来る始末だったので。

「三つの千両箱はどこで誰が受取ったんだ」

平次は第一問を発しました。

「店で私が受取り、手代や小僧に奥——と申しましてもこの部屋より外にありません。——ここへ運ばせて、御仲人おなこうどの佐野屋さん御夫婦、それに江島屋の番頭の太兵衛さんに一杯差上げ——」

「その間、千両箱は」

「その床の間に置いて、四人の眼で見張っております」

「一寸も眼を離さなかつたらうな——手水ちようずに立つとか、何とか」

「そんな事はございません。すぐ千両箱を開けて中味を見るのも、ガツガツしているようでたしなみが悪いと思い、四半刻ばかり経って、汗も乾き、心持も落着いたところで、四人立会いの上開けて見ました」

常右衛門はゴクリと固唾かたずを吞みます。

「すると、中は砂利が一パイ詰まっていたというのだろう」

「左様でございます」

「店からここへ持って来るとき、小判にしては軽いと気が付かなかつたのかな」「何分、皆な夢中になっておりました。それに、千両箱などは、奉公人達も持ち慣なれておりません」

傾いた家運を自嘲するように、常右衛門の唇には、淡い淋しい笑いが浮びました。

「この縁談を壊こわしたいと思う者があるに相違ないが——」
と平次。

「それはもう、親の私から申しては変に聞えますが、町内だけでも、娘を欲しいという方は十人や二十人じゃございません」

お関の人気の凄まじさ。ガラツ八はうろろうろ店口の方を見ております。その辺から、後光でも射すんではないかと思つたのでしよう。

「その中でも、一番がっかりするのは」

「手代の千代松でございます。——お関と一緒にして、暖簾のれんを分けてやる筈でしたが、こうなると、因果いんがを含めるふくより外に仕様もございません。分けてやる暖簾がこんなでは」

「それから」

「先刻の大川原五左衛門様も、ずいぶん腹を立てなすつたようで、でも、六百

五十両の金を返せば、これは文句がなかったでしょう」

「千代松は昨日どこにも出はしまいな」

「昨日も、一昨日も、萎しおれてはおりましたが、どこへも出掛けません。——それに、あれは遠縁の子飼いで、そんな悪いことをする人間ではないと思います——が」

常右衛門の言葉が、満更見当違いでないことは、平次にもよく解ります。あの久松型の正直で弱そうな千代松が、三千両をどうしようという人間とは覚えません。

「先刻五左衛門を取って押えた、長谷倉甚六郎という浪人者は、ありやどんな方だい」

「立派な方でございます。町内の若い衆にいろいろのものを手ほどきして、十年もこの隣りに住んでいらっしやいますが、あんな知恵者で、あんな立派な方

はございません。——娘のお関などは、どんなに可愛がって頂いたことか」

「すると、三千両はどこで誰が入れ替えたのだろう」

平次もここまで来ると、ハタと当惑とうわくしてしまいました。

「江島屋さんが、そんな事をなさる筈もございませんが、——それでも、ここ
でなく、途中でないとすると——」

常右衛門は江島屋の主人や番頭を疑っているのでしょう。

「とにかく、本当に江島屋から出したものなら、どこかに隠されているに違
ない。何とか捜し出す工夫もあるだろうから、あんまり気を落さない方がいい」

平次はそう言って常右衛門なぐさを慰めずにはいられませんでした。この主人は、
本当に首でも縊くりそうだったのです。

「縁談は破れたも同様ですから、江島屋さんからは、明日にも三千両の結納を
返せと言って来るに決っております。その時は」

濃い死の翳かげが、この中老年人の額を曇らせます。

「そんなに突き詰めちゃいけねえ、もう少し心持を大きく持つがいい」

平次もそう言うのが精々です。

それから千代松に逢いましたが、

「私は何にも存じません、——が、親分さん、旦那はあの通り、放っておけば、気が変になるか、死ぬか、どっちにしても無事で済みそうもありません。お願いですから、助けてやって下さい」

そういう一生懸命さが、平次を打つだけ、何の取止めたことありません。

「お前はまさか、三千両の行方は知っちゃいないだろうな」

「え？」

平次の言葉は冷酷れいこくでした。

「この縁談を壊すだけならいいが、三千両の行方が解らないとなると、幾人も

の命に拘かかわるぜ」

「親分さん、それじゃ、——私が、この私が隠したと言いなさるんですか」
千代松の唇はサツと白くなります。

「そうは言わないが——」

平次は煮え切らない返事をして背を見せました。

次に逢ったのはお関、これは恐怖と心配にさいなまれて、ただ、ひた泣くばかり、何を訊いても埒らちがあきません。

「私は何にも知りません、——でも、父とうさんは気の毒です。どうか、助けて下さい、親分さん」

そう言うだけ。

「千代松が怪しいとは思わないか、お関さん、この男はこの縁談を一番打ち壊したがっている様子だが——」

「そんな事はございません、——千代松は気の弱い正直者です。そんな大それた事をする千代松じゃございません」

千代松のこととなると、お関は必死と涙の顔をふり上げます。

平次とガラツ八は、これっ切りで大黒屋を切り上げました。これ以上粘ねばったところで、何の目星も付きそうにはなかつたのです。

引揚げ際に、砂利を詰めた三つの千両箱を見せて貰いたいと言うと、千代松は裏の物置に案内してくれました。

「旦那は見たくもないと言って、ここに投り込みました。——この通り」

鍵かぎも何にもない物置の中に、砂利じやりを詰めた千両箱が三つ、ガラクタと一緒に投げ込まれてあつたのです。

物置の外へ出ると、ポツポツ雨が降り出して来ました。隣の長谷倉甚六郎の浪宅からは、何やら素読そどくを教える声。

「八、大急ぎで帰ろうぜ」

平次は何となく淋しい心持で往来に飛出しました。金に支配されて、泣く者、怒る者、命まで投げ出そうとする者、その種々相が、江戸っ子で貧乏で、三両も三千両も同じように考えている平次には腹立たしかったのです。

五

翌る日の朝、——

卯刻半前むっに八五郎は叩き起されました。

「八、今日も歩くんだぜ」

「へエ——どこまで行くんで」

「まあ、黙って来るがいい」

平次は池の端の江島屋へ行つて、番頭の太兵衛を誘い出したのです。

「番頭さん、品川の大黒屋には、怪しいのは一人もねえ、——仲人の佐野屋夫婦は、馬の先に立って歩いてるし、千両箱には手も掛けないから、これは疑いようはねえ」

「すると」

太兵衛は撥ぐられるような不安に顔を上げました。

「一番損なのはお前だよ、番頭さん」

「へエ——」

「金は途中で抜かれたに違いないが、馬の後から歩いて来たお前が知らなきやどうかしている。馬を曳いて行った三次とお前が馴れ合えば、小判を砂利に変えられない事もない」

「冗談でしょう、親分さん、私は——江島屋の子飼で、白鼠しろねずみといわれた私が、

そんな馬鹿なことをするものですか」

太兵衛はいきり立ちます。中年者らしい頑固さが、相手の身分も、事情も忘れさせるのでしよう。

「それじゃ、池の端から品川へ行った道筋を一昨日の通り歩いて見てくれ。——どんな細かい事でも思い出して、話すんだ」

「行きましよう。こうなりや、唐天竺からてんじくまでも参りましよう」

「そんなに遠くまで行くには及ばない」

平次はこんな調子で、とうとう尻の重い太兵衛をおびき出したのです。

池の端仲町の江島屋の門口に立った三人は、

「さあ行こう、俺は佐野屋の代りに一番先だ、八は馬だ、一番後は一昨日の通り番頭さん——」

一歩踏み出しました。加藤織之助様屋敷の角を御数寄屋町おすきやへ——。

「どんな事でも言わなきやなりませんか」

「どんな事でも、石つころに躓つまづいたことでも、犬に吠えられた事でも」
平次はうなずいて見せます。

「この横町から出て来て、私に道を訊いた人がありましたよ」

いくらも歩かないうちに、——御数寄屋町と同朋町の間、狭い横町を太兵衛は指します。

「どんな人間だ」

「浪人風の男で、——顔は忘れましたが、額ひたいに古傷のあったことだけ覚えています。元黒門町の上総屋かずさへ用事があるが、どこをどう行けばいいか——と丁寧ていねいに訊くから、小戻りして教えて上げましたよ。上総屋はここから見えますませんが、少し戻ると、それ、よく見えるでしょう」

太兵衛は小戻りして元黒門町の方を指さします。

「その間に馬は？」

「佐野屋さんの後ろから、門かど奈伝十郎様の御屋敷前を、天神下へ曲りました」

「一寸の間見えなくなったわけだね」

「ほんの一寸、煙草一服喫すう間もありません。私は大急ぎで追っ駆けたんですから」

「江島屋のすぐ前でやったのは恐ろしい知恵だ」

平次は何を考えたか、その辺の路地を二つ三つ覗のぞいてもう先へ進もうともしません。

「ここで千両箱の中の小判を砂利じゃりに詰め替えたというんですかい、親分」
太兵衛はムツとした様子です。

「――」

「そんな暇ひまはありやしません。私は馬から十間とも遅れなかったんだ」

平次はしかしそれには応えようとしません。

「親分」

ガラツ八は平次の顔に動く表情から、事の重大さを読みました。

「十一屋へ行ってみよう、多分駄目だろうが」

と平次。

三人は飛脚屋ひきやくやの十一屋へ取って返しました。

「親方、三次は？ 昨夜から帰らないだろう」

飛込んだ平次。

「酔払って帰りましたが、今朝はまだ起きて来ませんよ。ゆうべ勝負事しょうぶで更ふかしたようで」

「大急ぎで逢いたい。その寝ているところへ案内してくれ」

「へエ——」

十一屋の親分は不承不承に立上がりました。三人を案内して、厩うまやの後ろへ廻ると、そこは中二階になって、三次の万年床が筵むしろの蔭に敷いてあります。

「三次、もう辰刻いつつだぜ、起きろ、——銭形の親分が、手前に逢いてえとよ」
ヒョイと筵をかかげた親方。

「あッ」

一ぺんにのけぞりました。

「何だ何だ」

覗けば、馬方の三次、飼糧かいばき切りの中に首を突っ込んだまま、紅に染んで死んでいたのです。

「親分、こりゃ大変なことになりましたね」

「こんな事だろうと思ったよ」

忙しく死骸を起しましたが、頸くびを半分切落されて、冷たくなつた三次から、何にも手繰りようはありません。

「こんな腕節の強い野郎の首を、飼糧切りに押し込むなんて、人間業じゃありませんぜ」

舌を巻くのは親方です。

「酔っていたんだらう。着物は泥だらけだ——」

「そういえば、馬鹿に当つたとか言つて、フラフラしながら帰つて来たようだが——」

解つたのはそれだけ、そこいら中を捜して見ると、小判が一枚小粒が二つ三つ落散っていましたが、それが多分三次の命を奪つた餌えさの残りでしょう。

「行こう、八、今度は品川だ」

平次は切り上げて、白日の中へ飛出しました。

六

品川の大黒屋へ行つて、ゆうべ家を開けた者はないか——と訊いて見ると、主人常右衛門始め、手代の千代松も、その他の奉公人も、宵から湿しめっぽく引き籠つて、一人も出た者はないとわかりました。

「お関さんにちよいと逢いたいが」

平次は最後の切札を出すより外に工夫はありません。

「親分さん、御用は？」

美しいが、おどおどするお関、その顔を平次はジツと見ました。

「お関、——人間が一人殺されたよ。——この縁談を打ち壊してくれ——と、誰に頼んだ」

「言ってくれ、——三千両の大金は、人一人を氣違いにする。——早く言ってくれなきや、この上とも騒さわぎが大きくなるぜ」

平次は、事件の火元ひもとをお関と見たのです。これほどの美しい娘が、涙ながらに頼んだとしたら、どんな恐ろしい事が起るか、よく解るような気がしたのです。

「私は何にも存じません、親分さん」

お関の眼の清らかさ。

「それは本当か」

平次の当惑さは一と通りではありません。

「親分、千代松を当って見ましよう」

ガラッ八は口を出しました。

「いや、千代松にこれ程のことは出来ない」

平次は頸を捻ひねっております。

「それじゃ、これだけ聞かしてくれ、——昨日おとといのあの時刻に、三千両の結納が馬で来るのを知っていたのは誰と誰だ」

「それなら申上げられます、父とうさんと千代松と」

「それから」

「あとは奉公人達も知りません」

「若しや、お隣の浪人には話さなかったか」

「長谷倉はせくら様には、御心配して頂いて、ツイ愚痴ぐちを申しました」

「有難う、それ位でよかろう」

平次はお関に別れて外へ出ると、そつと店の小僧を物蔭に呼出しました。

「小僧さん、昨夜お隣の御浪人のところに素読の稽古があつたかい」

「夜は休んだようですよ、頭痛ずつうがするとか言つて

「そうだろう、頭痛のするような晩だったよ」

平次はガラツ八を眼でさし招くと、

「八、いいか、今度は命がけだよ」

そつと囁きます。

「何をやらかすんで」

「俺と一緒に来るがいい」

真つ直ぐに入ったのは、言うまでもなくお隣の浪人者、長谷倉甚六郎の門口です。

「御免」

「ドォレ」

破れた障子を開けて、狭い土間へ顔を出したのは、主人長谷倉甚六郎自身で

した。尤も天にも地にもたった一人暮し、取次も、主人も兼帯けんたいの貧乏浪人でもあつたのです。

「長谷倉さん、少し殺生が過ぎましたネ」

平次はズバリと言つて退けました。

「な、何を申す」

「三千両はお関さんが可哀想だから隠したのでしよう。それは解りますよ。江島屋の馬鹿息子へ、あの娘をやるくらいなら、あつしだつて馬子まごを脅おどかして、同じ鹿毛馬かげを仕立てさせ砂利を詰めた千両箱を背負わせて、天神下の角でアツという間に入れ換えるくらいの芸当はやりますよ」

平次は遠慮もなくまくし立てます。

「無礼者ッ、何を言うのだ」

「脅おどかしっこなしに願ひましょう。——額おどに古傷を描いて、番頭の太兵衛に道

を訊き、ちよいと馬から遅らせたのは旦那の前だが、大した働きだ」

「黙れッ、無礼者ッ」

「だが、三次を殺したのはやり過ぎですよ。旦那、人の命さえ取らなきやア、この平次は眼をつぶってあげたのに」

「おの己れッ」

何時の間に抜いたか、長谷倉甚六郎の手に閃めく一刀、平次の肩先へ電光の如く浴びせるのを、引つ外して懐へ入った右手、それが颯と拳がると、得意の投げ銭、七八枚の四文銭が、続けざまに飛んで、——二つ三つは除けましたが、幾つ目かは甚六郎の額を打ち、顎を打ち、肘を打ちます。

「御用ッ」

「神妙にせいッ」

平次の袖の下を掻いくぐって飛込む八五郎、その鼻の先へ白刃がスーッと靡

くと、上りかまち框の破れ障子はピシリと閉じられました。

「八、抜かるな」

「合点」

飛込む二人。が、一步遅れました。長谷倉甚六郎は、入口の二畳におおあぐら大胡坐をかくと、肌おしひろげて、一刀をわれとわが腹に突っ立てていたのでした。

七

「気の毒なことに、お関を助けるつもりでやった細工だ。最初は大した悪気わるぎがなかつたろう」

「――」

平次は長谷倉甚六郎の死体を片手拝みに、湿しめっぽくこう言うのでした。

「そのうちに、あんまり器用に三千両を隠したので、これほどの人も欲が出た。

——お関の嫁入りを邪魔するつもりで隠した三千両だが、あんまり自分の知恵が逞たくましかつたので、ツイ、三千両を隠しおおせる気になった。馬子の三次を眠らせさえすれば、誰知る者もあるまいと思つたのが間違ひ——」

「もう一人、代りの馬を曳いて天神下で待つていた相棒があつた筈じゃありませんか」

「それは多分、かなりの金を貰つて、その晩のうちに遠方へ逃げてしまつたらう。三次は江戸の酒と女と賽さいころに引かされて踏み止まつたばかりに飼糧かいばきり切の中へ首を突つ込まれた」

平次の明察に曇りはありません。

が、三千両の金の隠し場所は、死んだ長谷倉甚六郎の口からでも聞かなければ、容易に解りそうもなかつたのです。

甚六郎の浪宅は、ほんの二た間、嘗めるように捜しましたが、三千両は愚か、三両の貯えたくわもありません。

「こいつは驚いた。三千両はどこへ消えたんだ」

ガラツ八は根氣よく見て廻りますが、日が暮れるまで見付かりません。

そのうちに検屍も済み、隣りの大黒屋の主人や、日頃娘のように可愛がつて貰ったお関も来ました。死体の始末をして、鉦かねと燭台を出す積りで小さい仏壇を開けると、中には金色燦爛さんらんたる豪華な仏具が一パイ。

「おや、これは、私の家の物置に預かつてある品だが——」

常右衛門の顔は不思議でした。

「それはどういうわけで？」

「長谷倉さんは昔は大した御身分で、お国許では大きな仏壇を持っておられたが、浪々の身ではそんな仏壇を裏長屋に置くわけにも行かないと仰しゃって、

大きな茶箱に仏具を一パイ詰め、お位牌、燭台一つ、香炉こうろ一つ残したあとは、皆な私の家の物置に預けて置きましたよ」

「成程、その物置にある筈の仏具がこの家の仏壇へ一パイ詰っているのが不思議だというわけだね」

「へエ——」

話はそれっ切りでしたが、通夜僧つやそうが来て読経が済むと、

「御主人、一寸」

平次は常右衛門を呼出しました。

「へエ、——何か御用で」

げげんな顔をする常右衛門とガラッ八ちようちんに提灯の用意をさせて、つれ込んだのは、大黒屋の物置、砂利を詰めた千両箱が三つ、浅ましく投げ出された中に三人は立ちました。

「自分の家でないとすると、大黒屋に隠すのが一番確かだ。長谷倉という浪人は知恵者だね」

「へエ——？」

平次の言葉は謎のようです。

「長谷倉甚六郎から預あずかったという、仏具の箱は？」

「あれですよ、親分」

主人の指した茶箱、簡単に掛った縄を払って開けると、中には千両箱が三つ、蓋ふたを開くと、三千枚の小判が、燦さんとして灯の下に光ります。

「あッ」

常右衛門とガラツ八は、思わず声を呑みました。

「御主人、この金は江島屋へ返すがいい。三千両で売っちゃお関さんが可哀想だ、——千代松は婿にして不足はない男だ。——借金は働けば返せるだろう。無

法な利息は、お上へ届出て、何とかして貰えるだろう」
平次は小判の光と、驚き呆れる常右衛門の顔を見比みくらべながら、
沁々しみじみとこう言
うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十二年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>